

『万病回春病因指南』の成立過程と構成

渡部 栄輝

日本鍼灸研究会

はじめに 『万病回春病因指南』（以下、『病因指南』と略す）は、明代の医書『万病回春』に基づき著された、江戸中期の元禄8〔1695〕年刊行の病因病證学書である。『万病回春』は、龔廷賢が万暦15年（1587）に著した医方書で、日本では慶長年間以降、18世紀初頭までに20回以上重刊され、解説書も数多く出版されている。江戸前期に最もよく読まれた医書の一つである。

『病因指南』の編纂意図 岡本一抱（1654～1716）は、『万病回春』の手引書として先ず貞享5（1688）年に『万病回春指南』（以下、『回春指南』と略す）を著した。その凡例の最後に「回春ノ意義盡す所ニ非。蓋万分ノ一助耳。後日更ニ指南附録ヲ刊布シテ猶亦此ガ不足ヲ補ワント欲スルノ志アル」と記した通り、引き続き『病因指南』、『万病回春脈法指南』（宝暦5〔1755〕年刊。以下、『脈法指南』と略す）、『薬性指南』（未刊）を編纂した。『病因指南』は『万病回春』の「病因病理」を、『脈法指南』は同じく「脈状」を、『薬性指南』は「処方」をそれぞれ詳述したものである。『病因指南』の凡例に「凡医ノ要、病因ニアリ。病因明ニシテ而シテ後ニ診脈ノ神ニ通ズ。診脈神ニシテ而シテ後ニ薬性ノ寒温補瀉ニ達ス。薬性ニ達シテ而シテ後ニ治術施スニ易クシテ其ノ効アルコト空谷ノ響ノ如シ」とあるように、一抱は病因をもっとも重視した。ただ『回春指南』の凡例では「回春八集ノ内、惟病名有テ因症ナク、或ハ雖有因症。其事ノ未詳者ハ、悉ク諸家参考シテ探本求源」と記し、『万病回春』の病因病理論の不足を指摘している。『病因指南』著述の動機はこの不足を補うことにあるため、『万病回春』本文の注解にとどまらず、内経や金元明の医説を統合折衷した一抱の医論を広く開陳している。

また、『病因指南』の序に「瞰今之世粗工、不知病根本処与所名実樹……」とあるように、金元明医学的な陰陽五行論に基づく病態把握を行わない当時の医家の存在も、『病因指南』編纂の意図とすることができる。『病因指南』が刊行された元禄年間に、病因病理を論じた医書が、同じ学統の饗庭東庵の門人・外山道機（『医教指南』）や味岡三伯門下の浅井周伯（『内経病機撮要』）により著されていることも、同じ事情によるものであろう。

『病因指南』の病門構成 『病因指南』の構成は、『万病回春』に準拠しているが、篇目の増減があり、また一抱の自説の論述を主としているため、必ずしも忠実な注解とはなっていない。例えば、『病因指南』の「喘急哮喘」中で、一抱は『万病回春』の篇目である「喘急」と「哮喘」を合併させた理由として「喘急与哮喘本一症。只軽重ノ分アルノミ」と述べているが、『万病回春』の枠にとらわれない一抱の姿勢をよく表している。

『万病回春』は全163篇からなるが、『病因指南』では「万金一統述」「薬性歌」「諸病主薬」「积形体」「週身蔵府形状」「人身背面手足之図」「十二経脈歌并補瀉温涼薬」「十二月七十二候歌」「預防中風」「喘急」「哮喘」「嘈雜」「青筋」「悪熱」「産育」「乳岩」「婦人諸病」「補遺秘方」「麻疹」「諸瘡」「杖瘡」「折傷」「金瘡」「破傷風」「湯火」「蟲獸」「中毒」「骨髄」「五絶」「膏薬」「通治」「奇病」「雲林暇筆凡十二條」「龔氏家訓凡三十二條」の34篇が削除され、「喘急哮喘」「（附）黄腫胖病」「（附）弁人情」「妊娠十一症之論弁」「臨産」「婦人諸病所因通法」「痘瘡諸症所因」「麻疹水痘」「諸瘡症戒破傷風」の9篇が新設され、138篇で構成されている。すなわち『万病回春』巻1の「万金一統述」から「十二月七十二候歌」までの8篇と、巻8の末の「雲林暇筆凡十二條」と「龔氏家訓凡三十二條」は、『病因指南』では扱われていない。「喘急」と「哮喘」は、「喘急哮喘」に一括され、「嘈雜」は「暖氣附嘈雜」と改め、「乳岩」は「乳病」に組み込まれている。「産育」「婦人諸病」は、それぞれ新設の「臨産」と「婦人諸病所因通法」に内容が近い。「麻疹」は「麻疹水痘」と改名されるが、『万病回春』には水痘を冠する篇も病論も見られない。新設の「諸瘡症戒破傷風」は「諸瘡」「杖瘡」「折傷」「金瘡」「破傷風」を一括したように見えるが、僅かに瘡と破傷風が言及されるのみである。また6篇の序列が変更されている。すなわち隣り合う「瘡病」と「消渴」が入れ代わり、連続する「泄瀉」「吐瀉」「痢疾」「瘡疾」4篇は6篇前の「癰疾」の前に置かれている。